

ルール解説

ルールの理解は勝利への一歩だ！

試合運営委員会から選手の皆さんへ

第二部 第五回テーマ 何をきいたらいいですか？

前回に引き続き、質疑応答の解説をしていきます。前回は、応答側の立場からやるべきことを考えました。そこで今回は、質疑側から考えていきたいと思えます。「とりあえず、プランを確認する」「一応、どれくらいの数なのか聞いておく」、そんな考えで質疑をしていませんか？「なんとか間を持たせる」なんてことになってはいませんか？「とりあえず」にならない質疑内容の決め方、お伝えします。

◆質疑は立論・反駁で生かしてこそ意味がある

質疑応答の扱いは、第一部の第四回や前回で学びました。応答の内容は立論の補足、つまり立論を明確にしたり、より詳しくしたりしたものとして扱われます。これだけを見ると、質疑者の活躍は自分たちの勝ちに直結しないように見えるかもしれません。確かに、質疑一人でチームを勝ちへは導けません。しかし、ここでルールの次の規定を見てください。

ルール本則第三条第二項

質疑で明らかとなった情報を議論に生かすためには、その後の立論や反駁で改めて述べる必要があります。

これはどういうことでしょうか？

例えば、「日本は炭素税を導入すべきである」という論題で、「鉄鋼業と関連産業で三百万人の失業者が出る」というデメリットについて、質疑応答により、

三百万人のうち鉄鋼業が二十万人で関連産業が二百

八十万人だとわかったとします。この内訳は、立論では述べられていなかったものが応答によって補足されたこととなります。とはいえ、これだけでは「三百万人が失業する」というデメリットを否定することにはなりません。しかし、例えば立論で「炭素税導入により環境ビジネスが盛んになり二十万人の雇用が生まれる」と証明し、さらに第一反駁で「炭素税が導入されても鉄鋼の価格には反映されず、関連産業のダメージはほとんどない」という反駁をして、「失業するのは鉄鋼業だけだから二十万人で、同じだけの雇用も生まれるので日本全体では失業者は増えない」と主張します。こうすることで、質疑がない場合にはなかなか展開できないような、強力な議論が展開できます。このように質疑は、立論や反駁と連携してはじめて大きな意味を持つのです。

◆有用な情報を引き出すためには、準備を！

質問内容を考えるには、どんな情報が必要か考えます。そのためには、その後のパートの担当者がどんな反駁をし、どう議論をまとめるかを理解していることが重要です。たとえば先ほどの例では、反駁者が鉄鋼産業へのダメージが少ない事を反駁する予定でない限り、その質疑は生かされませんし、質問の目的を質疑者が理解していないと、上手に情報を引き出せません。しかし、相手の立論からこちらの質疑までの準備

時間は非常に短いので、これらの情報をこの時間だけで十分に共有することは難しいでしょう。

ですから、「こういう議論が来たら、こう反駁したい。それには、こんな情報が必要だ」というような作戦を、チーム全体でしっかり練り、共有する必要があります。どんな情報がほしいかを考えていくことで、どんな質問をすべきが見えてきます。

ただし、試合では、相手の立論がいつも予想通りの内容ばかりとは限らないので、事前準備だけでは初めて見る議論への対応は困難です。そこで重要になるのが、質疑者の反駁を考える能力です。

質問をするときに、「この立論なら、こんな反駁ができそうだ」という目星をつけた上で、それに必要な質問をするようにするのがいいです。そしてその意図を反駁の担当者に理解してもらい活用してもらいましょう。また、もし反駁の担当者が理解できていないようなら、反駁前の準備時間を使ってどういった反駁ができるかを説明することもできます。

ですので、質疑をする人も、相手の立論に対して反駁を考える練習を積んでおくことが重要です。質疑担当者、質疑のみの専門家としないでください。質疑応答の際のチーム代表者として、皆で練った戦略のために活躍できるように努めてください。

次回予告に代えて

今回で、第二部の解説を終わります。この解説が、よりよいディベートに繋がることを願います。